

平成30年5月19日 エクスカーション説明会 in ここ滋賀（関係者資料）

「びわ湖と暮らし」を教材にした 主体的・対話的で深い学びは、 都会人の「共感力」を高める！

びわ湖の教材化
PROJECT
修学旅行 Ver.1

説明会

近年、第一次産業の課題として、都会の消費者に欠けている「問題を自分事化する共感力」がクローズアップされる中、ビジネスや持続可能な社会づくりの現場では、消費者や住民に対して“共感を生み出し、人を動かす”という新しいアプローチが広がり始めています。

SNS等の一般化により、人と直接的に関わらずに過ごす時間が多くなり、異なる世代と協働する機会が少なくなった日々の暮らしにおいて「共感力」を高めるためには、他者の前で認めたり、気づきが得られるよう働きかけたりしながら、自己肯定感や自信を持たせることが大切だと考えています。

滋賀県では、身近なびわ湖について、地域の人対話し、協働しながら、びわ湖と共に生きる暮らしが今も続いています。我々、近畿環境パートナーシップオフィスにおける環境省事業の様々な実証からも、このような多様な人との関わりや協働による暮らしの中に、「共感力」を育むための要素がたくさん含まれていると実感しています。

今回、「共感力」を高める教材として評価が高い「ふるさと絵屏風・心象絵図（集落や地域を対象にして、そこに生きる一人ひとりの心に息づく思い出を集めて描く、ものがたり絵図）」を活用し、地域の多様な人々との出会いや対話を通して、気づきや感動を促す体験型学習：エクスカーションをご提案させていただきます。

●**実施内容**：修学旅行・体験学習旅行を担当する関東地方の高校教員・教育旅行関係者の方を対象として、びわ湖とその周辺の自然・文化や暮らしの知恵をESDの教材として活用するプログラムと、コンシェルジュとしてのびわ湖大津館（<http://www.biwako-otsukan.jp/>）の利用についてご説明させていただきます。説明会では、モデルコース（一部）をご提案させていただきます。

●**日時**：平成30年5月19日（土） 14:50～16:50（開場 14:40）

●**場所**：ここ滋賀 2階 滋乃味（〒103-0027 東京都中央区日本橋 2-7-1）

●**対象**：修学旅行・体験学習旅行を担当する高校教員・教育旅行関係者の方を対象とします。
（先着順：定員10名 ※定員になり次第、締め切らせていただきます。）
※特に、ユネスコスクール（高校）などにおいてESDに取り組まれている高校教員の方々。
また、教育旅行関係者では、新学習指導要領、ESD的な能力育成、日本の文化理解等の分野等に
関連して新たなサービスの展開を希望される担当者の方々。

●**主催**：近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館）

●**申込方法**：E-mail 又は FAX にて、参加者全員のお名前、所属、連絡先（E-mail 等）を記載していただき、件名「びわ湖の教材化PROJECT説明会参加希望」にて、下記の申込先までご送付ください。

●**申込締切**：平成30年5月18日（金）18:00まで

【申込・問合せ先】

近畿環境パートナーシップオフィス（きんき環境館） 担当：蒔田

E-mail：office@kankyokan.jp、FAX：06-6940-2022、TEL：06-6940-2001

【びわ湖の教材化PROJECT 修学旅行 ver.1】

各ステップでは、人と自然とのつながりを暮らしの中から学び、探究する機会を用意しています。

びわ湖大津館での絵解き



STEP 1 : ふるさと絵屏風による導入

環境学習船



STEP 2 : クルージング・船上学習

びわ湖周辺の各地



STEP 3 : 実地学習 ESD エクスカーション

「ふるさと絵屏風・心象絵図」とは、地域の人々の身識（みしき：体験から得た知恵）や記憶をもとに地域に根ざした生き様を描いた絵図です（下図参照）。滋賀県下を中心に様々な地域で製作されています。

STEP 1 びわ湖大津館で各地域の絵屏風・絵図を見ながら、びわ湖（地域）と共に暮らす人々への共感・関心を高めるきっかけを提供します。

STEP 2 学習船でのクルージング等により現地へ移動します。エクスカーションの行き先は、大津市南比良、近江八幡市、長浜市（平成 31 年度予定）等を予定しています。

STEP 3 現地では、お年寄りが語り部として、地域を描いた絵をもとに自らの経験を伝える「絵解き」などを体験する他、実際に地域を歩いて五感を使いながら世代間・地域間・多様な人々との交流を進め、びわ湖と共に暮らす地域を深く知ります。

これらの体験を素地として、他者と共感する力を自ら培っていきます。



「ふるさと絵屏風・心象絵図」は、滋賀県立大学地域共生センターの上田洋平氏により開発された。左図はその一例で、大津市南比良の暮らしが描かれている。地域住民へのアンケートや聞き取り調査を行い、下絵を描いて着色し、絵図完成まで1~2年を要する。

地域で生きる中で実際に人々が体験した身識（みしき）等が、絵図の中で一度に見渡せるものとなっており、地域の世代間・多様な主体間の想いをつなぎ、ふるさとの思い出を未来に向けて育てる機能を持ち、環境・福祉・教育等様々な分野で活用されている。

本事業では、滋賀の歴史・文化を地域の人から対話的に学ぶ教材として活用することを目指している。

「教材」としてのびわ湖 – 自然共生社会に向けて

人間を含む、地球に生きるすべての生物が共に暮らすことができ、自然からの恵みを受けつづけることができる社会を「自然共生社会」と呼びます。日本では古来、人と生き物が自然の恵みを受けて生きてきました。しかし、次世代においても恵みを受け続けるためには、その恵みを継承する意識・態度・行動を育むことが、持続可能な未来を創る上で大切です。

ところで、滋賀県が作成したレポート「びわ湖と暮らし 2016 – 恵み 味わい 暮らし つなぐー」では、いまのびわ湖とそれを取り巻く私たちの暮らしの状態とこれまでの経緯が様々な側面から示されています。レポートによると、びわ湖流域が抱える課題を考えると、水質・漁獲量・水草などの個別の要素だけで考えるのではなく、それぞれがどのように影響しあっているのかという関係性についても把握することが大切だそうです。びわ湖と暮らしのつながりの中で、影響の大きな要素は何かを見きわめながら、取り組みの方向性を考えることが必要だと言われています。今回ご提案するエクスカーションでは、このレポートのような観点に留意して、びわ湖の暮らしと環境のつながりを実感する機会を提供します。